

学位論文要約

日本語学習者の主題の習得に関する研究

広島大学大学院 教育学研究科

文化教育開発専攻 日本語教育学分野

D113919 小口悠紀子

I. 論文題目

日本語学習者の主題の習得に関する研究

II. 論文構成（目次）

第1章 序論

第1節 本研究の背景と問題の所在

第2節 本研究の目的

第3節 本論文の構成

第2章 先行研究の概観

第1節 第二言語習得における母語の影響

第2節 主題とその周辺

第1項 本研究における主題の定義

第2項 主題を表す「は」

第3項 言語文脈による省略

第4項 談話における「は」と「が」の使い分け

第5項 日本語，中国語，英語の主題の対照

第3節 第二言語における主題の習得研究

第1項 主題卓越構文の習得普遍性を巡る議論

第2項 日本語の「は」の習得に関する研究

第4節 研究課題

第1項 先行研究に残された課題

第2項 本研究の課題

第3章 日本語学習者の主題化に関する知識-受容性判断課題による検討-

第1節 上級学習者のガ格の主題化における言語知識（実験1）

第1項 実験1の目的

第2項 実験1の仮説

第3項 実験1の方法

第4項 実験1の結果

第5項 実験1の考察

第6項 実験1のまとめ

第2節 上級学習者のヲ格の主題化における言語知識（実験2）

第1項 実験2の目的

第2項 実験2の仮説

第3項 実験2の方法

第4項 実験2の結果

- 第5項 実験2の考察
- 第6項 実験2のまとめ
- 第3節 上級学習者のノ格の主題化における言語知識（実験3）
 - 第1項 実験3の目的
 - 第2項 実験3の仮説
 - 第3項 実験3の方法
 - 第4項 実験3の結果
 - 第5項 実験3の考察
 - 第6項 実験3のまとめ
- 第4節 上級学習者のノ格の主題化における言語知識（実験4）
 - 第1項 実験4の目的
 - 第2項 実験4の仮説
 - 第3項 実験4の方法
 - 第4項 実験4の結果
 - 第5項 実験4の考察
 - 第6項 実験4のまとめ
- 第4章 日本語学習者の談話における主題管理-物語発話産出課題による検討-**
 - 第1節 英語を母語とする中級日本語学習者の主題管理（予備調査）
 - 第1項 予備調査の目的
 - 第2項 分析の概要
 - 第3項 結果と考察
 - 第4項 物語発話産出課題（予備調査）のまとめ
 - 第2節 中国語、英語を母語とする上級日本語学習者の主題管理（本調査）
 - 第1項 調査の目的
 - 第2項 調査の概要
 - 第3項 結果と考察
 - 第4項 物語発話産出課題（本調査）のまとめ
- 第5章 総合考察**
 - 第1節 日本語学習者の主題化に関する言語知識
 - 第2節 日本語学習者の談話における主題管理
 - 第3節 母語の類型論的特徴が日本語学習者の主題の習得に及ぼす影響
 - 第4節 本研究の成果と教育的示唆
 - 第5節 今後の課題

引用文献
補助資料

III. 論文要旨

第1章 序論

第1節 本研究の背景と問題の所在

談話における主題標識の使用，主題の省略（Φ）の習得が、日本語学習者にとって困難である理由のひとつに、母語の影響が指摘されている（Nakahama 2011）。日本語の主題を表す「は」と「が」については、習得順序研究の分野で長年論じられてきたが、学習者が持つ言語知識や、主題の習得に関わる具体的な要因については十分検討されていない。また、学習者が何を主題として談話を展開し、どのような形式で主題を管理しているのかを、体系的に調査した研究はほとんどない。Li and Thompson（1976）は言語が持つ特徴から世界の言語を主題卓越言語と主語卓越言語に分類している。この分類によると、日本語と中国語は、主題卓越性が高く、類型論的な特徴を共有するが、英語は主語卓越性が高く、類型論的な特徴が異なる。こうした母語の類型論的な特徴が習得に影響するか否かについては、複数の言語習得過程を対象に研究が行われているが、いまだ研究間で結果や見解が一致しておらず、議論の対象となっている。そこで、本研究では類型論的に異なる中国語と英語を母語とする日本語学習者の主題の習得を対象に、言語間の比較を通して母語の影響について検討する。

第2節 本研究の目的

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CH）と英語を母語とする日本語学習者（以下、EN）の主題の習得を対象に、日本語母語話者（以下、NS）との比較を通して、以下の2点を明らかにする。

（目的1）CH、ENは、主題化に関してNSと同様の言語知識を有しているか。もし有していない場合、学習者の主題化の知識に母語はどのように影響し得るか。

（目的2）CH、ENは、談話においてNS同様の主題管理ができるか。もしできない場合、学習者の主題管理に母語はどのように影響し得るか。

第3節 本論文の構成

全5章で構成されている。第1章では、研究の背景と目的を述べ、第2章では先行研究の概観と問題定義を行う。第3章では目的1について、受容性判断課題を用いて検討する。第4章では目的2について、物語発話産出課題を用いて検討する。第5章では、各章の研究結果をまとめ、総合考察を行い、本研究の成果と教育的示唆、今後の展望を述べる。

第2章 先行研究の概観

第1節 第二言語習得における母語の影響

Odlin (1990) は、言語間の類似・相違点から生じる影響のことを言語転移と呼んでいる。本研究では、これに従い、第二言語の知識や運用に現れる母語の影響と言語転移を同義に扱う。そして、母語の影響は必ずしも意識的なものとは限らず、無意識的なものも含まれることとする。

言語転移研究が抱える課題として、奥野 (2005) は (1) 母語の影響の認証方法, (2) 言語処理レベルと母語の影響の関連性, (3) 母語の影響とそれ以外の要因との関連性の3つを取り上げている。第2章1節では、これら3つの課題に対し、本研究がいかにかにアプローチするかについて述べる。

第2節 主題とその周辺

本研究では、三上 (1970) をもとに、主題とは、その文が何について述べるのかを示すものであると定義し、文の成分を何らかの方法で主題として表すことを「主題化」と呼ぶ。

主題はあらゆる言語に存在するものの、主題を表す方法は言語によって異なっている。そこで、第2節では、日本語の主題の特徴と、中国語、英語の特徴を対照する。

Li and Thompson (1976) は主題卓越言語が持つ特徴として、主題標識の付与、主題要素の文頭配置、ゼロ照応を挙げている。また、二重主語構文を主題が卓越した言語に典型的な構文であるとしている。日本語の主題は、文頭配置、ならびに主題標識「は」やゼロ照応「 Φ 」で明示的に示され、談話ではこれらを可変的に扱うことで主題の連続性・非連続性を表す。しかし、中国語は主題標識を持たず、英語は日本語の主題表記に相応する特徴をいずれも持たない。本研究では、このような学習者の母語の違いが、日本語の主題の習得にいかにかに影響し得るかを探る。

第3節 第二言語における主題の習得研究

Fuller and Gundel (1987) は主語卓越言語の習得初期に、主題卓越構文が現れる時期が母語にかかわらず普遍的に存在すると主張した。しかし、先行研究の多くは、これを支持しない立場に立ち、議論の中心は、主題卓越、もしくは主語卓越という母語の類型論的特徴が第二言語習得に影響するか否かに移りつつある。Fuller and Gundel (1987) の主題卓越構文の習得普遍性に言及した日本語習得研究はまだほとんどないが、日本語の主題標識である「は」の習得については、1980年代後半以降、誤用分析研究、中間言語研究、習得順序研究が多く行われ、主に (1) 「は」を使うべきところで「が」を使う誤用が多いこと, (2) 談話レベルでの「は」「が」の使い分けが困難であり、超級レベルでも誤用が見られること, (3) 「は」で主題化されるのはガ格が最も多く、ガ格以外の主題化が習得されているとは言えないこと等が指摘されている。そしてこれらの研究をまとめた八木 (1999) は、「は」が「が」に先行するという、出現、正用順序の大きな特徴について、主題卓越構文の習得普遍性との関連を指摘している。

第4節 研究課題

先行研究からの主な課題として、3点挙げる。

まず、1点目は、探索的手法の研究の蓄積が中心であり、学習者の持つ言語知識や習得に影響を及ぼす要因について具体的に検討されていない点である。

2点目は、ガ格以外の主題化の習得について、検討が進んでいない点である。特に、ガ格と同様、主題化されやすい格として挙げられるヲ格や、主題卓越言語の典型的な特徴の1つであるノ格の主題化（「XハYガZ」文）については、ほとんど明らかになっていない。

3点目は、母語の影響を主張するための十分な証拠が得られていない点である。Odlin (1990) は母語の影響を検討するために、類型論的に異なる母語を持つ学習者を対象に調査を行う必要性を指摘している。しかし、先行研究では、母語の統制が不十分であるものが多い。特に日本語学習者の談話における主題の習得を母語の影響の視点から検討した Nakahama (2011) では、英語と韓国語しか検討されておらず、韓国語による母語の影響が類型論的な枠組みで起こり得るものなのか否か、他の主題卓越言語を対象に検討する余地がある。

そこで、本研究は、日本語と類型論的に類似する中国語（主題卓越言語）を母語とする学習者と、相違する英語（主語卓越言語）を母語とする学習者を対象に、談話における主題化の習得について、問題の在処を探る。研究課題は以下の通りである。

(研究課題1) CH, EN は、主題化に関して NS と同様の言語知識を有しているか。もし有していない場合、学習者の主題化の知識に母語はどのように影響し得るか。

(研究課題2) 中国語と英語を母語とする日本語学習者は、談話において NS と同様に主題管理ができるか。もしできない場合、学習者の主題管理に母語はどのように影響し得るか。

研究課題1については、第3章でガ格、ヲ格、ノ格の主題化構文の受容性判断課題を用いて検討し、学習者の習得における問題の在処を探る。研究課題2については、第4章で物語発話産出課題を用いて検討し、従来の研究で指摘されている「は」と「が」の使い分けや、「Φ」の使用について調査する。そして、主題の習得に母語が及ぼす影響について知識と運用の両面から考察する。

第3章 日本語学習者の主題化に関する知識-受容性判断課題による検討-

第3章では、受容性判断課題を用いた実験を行った。調査参加者は CH22名、EN31名であった。全員が本調査実施時には日本の高等教育機関に留学中であった。調査実施前に総合的な日本語運用能力を測定するとされる SPOT ver. A を実施し、点数が 51点から 65点であった者を対象とした。比較考察のベースデータとして日本語母語話者 17名にも調査を実施した。課題文は、

全て日本語の初級レベルの教科書に出現する語彙で構成し、各条件文は同じ性質を持つ品詞を用いるよう統制した。調査は、課題文の呈示、及び反応時間と回答の自動測定のために、パーソナルコンピューターと周辺機器を用いた。注視点を呈示した直後に、課題文を画面に視覚呈示し、同時にヘッドホンまたはイヤホンから聴覚呈示した。調査協力者には、呈示された文が「日本語としてどれくらい自然だと思うか」について「とても自然」、「まあまあ自然」、「やや不自然」、「とても不自然」のうちどれにあたるかを出来る限り早く判断し、対応するキーを押すよう求めた。分析対象はいずれの条件も制限時間内に反応があった回答の受容度の数値のみとした。

第1節 上級学習者のガ格の主題化における言語知識（実験1）

実験1は、CHとENが、ガ格が先行文脈に既出の名詞句である場合は「は」を付与して主題化するが、未出の場合は「が」を付与して主題化しないという言語知識を有しているか否かを明らかにすること、及び、母語における「標識の有無」が言語知識に影響し得るか否かについて考察した。

実験の結果、先行文脈に応じて「は」と「が」を使い分けるというガ格の主題化に関する言語知識がCH、ENに十分ないことが示された。また、CH、ENが、談話レベルでの標識の機能が習得困難であるのは、母語に主題標識が存在しないことが影響した可能性を指摘した。

第2節 上級学習者のヲ格の主題化における言語知識（実験2）

実験2は、CH、ENが(a)ヲ格（目的語）が文頭に配置されることがある、(b)「は」が文頭に来やすいという言語知識を有しているか否か、及び、母語における「文頭配置の有無」「標識の有無」が言語知識に影響し得るか否かを明らかにすることを目的とした。

実験の結果、標識「は」は文中のヲ格に付与し難いという言語知識が、CHとENにあることが分かった。ただし、この結果はあくまでもヲ格の配置と標識との関係という文レベルでの知識である。談話レベルでヲ格を主題化するための知識があるか否かについては、先行文脈とのヲ格の主題化の関わりについて調査する必要があるため、実験3で検討する。

第3節 上級学習者のヲ格の主題化における言語知識（実験3）

実験3は、CHとENが、ヲ格が先行文脈に既出の名詞句である場合に「は」を付与して主題化するという言語知識を有しているか否かを明らかにすること、及び、母語における「標識の有無」が言語知識に影響し得るか否かについて考察した。

実験の結果、CN、ENは、NSと同様、ヲ格が先行文脈に既出の場合、「は」が付与された文を、「を」より有意に高く受容した。即ち、CH、ENは、「は」を付与して主題化するという言語知識を有している可能性が示され、母語による「標識の有無」の影響は見られなかった。

第4節 上級学習者のノ格の主題化—XハYガZ構文における言語知識（実験4）

実験4は、CHとENが、文レベルでのノ格の主題化に関する言語知識を有しているか否かを検討した。また、母語における「構文の有無」「Yの意味的制約」が言語知識に影響し得るか否かについて考察した。

実験の結果、「XハYガZ」文について、ENは受容度が低かった。この結果から、母語に相応する「構文」を持たないことがENの言語知識に影響している可能性が示された。また、「XハYガZ」文のYが「所有物」の場合と「親族関係」の場合、ENはどちらも同程度受容したが、CHは「親族関係」の受容度が有意に低かった。この結果から、母語の「意味的制約」がCHの言語知識に影響している可能性が示された。

第4章 日本語学習者の談話における主題管理—物語発話産出課題による検討—

第4章では物語発話産出課題を行い、学習者の談話における主題管理について、運用面から探った。各節での課題は以下の通りである。結果については第5章第2節の説明を参照されたい。

第1節 英語を母語とする中級日本語学習者の主題管理（予備調査）

（課題1）ENは指示対象の「導入」「二度目の言及」「再導入」「連続した言及」という4つの文脈で、主題の連続性を表す形式をいかに使用しているか。

（課題2）ENの主題の連続性を表す形式の使用にNSとの差異が見られるか。また、学習者の母語はどのように影響し得るか。

第2節 中国語、英語を母語とする上級日本語学習者の主題管理（本調査）

（課題1）CH、ENは指示対象の「導入」「二度目の言及」「再導入」「連続した言及」という4つの文脈で、主題の連続性を表す形式をいかに使用しているか。

（課題2）CH、ENの主題の連続性を表す形式の使用にNSとの差異が見られるか。また、学習者の母語はどのように影響し得るか。

第5章 総合考察

第1節 日本語学習者の主題化に関する言語知識

ガ格の主題化については、CH、ENが先行文脈に応じた標識の使い分けの知識が不十分であり、母語の「標識の有無」の影響が見られた。ヲ格の主題化については、CHは文頭配置についての知識があるものの、ENはそれが不十分であり、母語の「文頭配置の有無」の影響を示した。ヲ格が先行文脈に既出の名詞句である場合は、CH、ENともに「は」を付与して主題化するという言語知識を有している可能性があり、母語の「標識の有無」の影響は見られなかった。ノ格の主題化については、ENは「XハYガZ」文の受容度が低く、これに相応する「構文」が母語にな

いことが影響した可能性がある。また、CH は Y が親族関係の場合の受容度が低く、母語の「Y の意味的制約」の影響が見られた。

第2節 日本語学習者の談話における主題管理

談話における主題管理について、研究課題に対し得られた主な結果を、指示対象の「導入」「二度目の言及」「再導入」「連続した言及」という4つの文脈に分けて述べる。

導入時には、CH、EN は「が」を使用して言及することが難しく、特に三人称を「が」で適切に表すのが困難な様子が見られた。これは、第3章の実験1の結果と類似している。ここから考えると、母語の標識の有無が、談話における「は」と「が」の使用に影響している可能性がある。また、NS、CH、EN は、男の子を主語位置で、蛙を目的語位置で導入していることから、有生性のスケール (Comrie 1981, 1989) の階層と登場人物の役割の重要性が主題管理に影響している可能性を示した。

二度目の言及時は、「は」や「Φ」の使用を中心に、概ね NS と類似した使用傾向が見られたが、EN は「Φ」の使用が顕著で、CH は「が」の多用が見られた。

再導入時は、NS は、人と比べると主題性が低い動物に対し「が」を選択する傾向が見られた。その一方で、EN の「が」の選択は非体系的である可能性が高かった。EN の「Φ」の使用が、二度目の言及、並びに連続した言及時と比べて低いのは、母語の影響の可能性のあることを指摘した。また、二度目の言及と再導入は、連続性が比較的高い状況であるにも関わらず NS が「が」を用いて対象を表す例が見られた。これについては、述語に新しい出来事や意外性を表す出来事がきた場合、NS は「が」を選ぶと考えられるが、CH や EN もその知識を有しているか否かは検討の余地がある。なお、連続した言及時には、CH と EN は「Φ」を使用し、適切に主題化することができていた。

第3節 母語の類型論的特徴が日本語学習者の主題の習得に及ぼす影響

本研究の結果から、母語の類型論的な特徴のうち、標識の有無、ヲ格の文頭配置、二重主語構文の有無が、日本語の主題の習得に影響する主な項目として指摘された。ならびに、標識の有無については、母語の主題・主語卓越性に関わらず、先行文脈に応じた「は」と「が」の使い分けが難しいことが指摘された。ただし、主題卓越言語である中国語の母語話者は、主題標識が持つ機能について英語母語話者と比べ、知識をより有しており、母語の類型論的特徴が影響している可能性が示唆された。ヲ格の文頭配置については、主語卓越言語である英語に存在しないため、英語母語話者にとって習得が難しい可能性を指摘した。二重主語構文については、主語卓越言語であり、これに相当する構文を母語に持たない英語母語話者にとって、習得が難しい可能性を指摘した。ただし、主題卓越言語であり、母語にこの構文を持つ中国語母語話者にとっては、二重主語構文内の名詞句の意味的制約に日本語との相違があり、家族関係を表す名詞句が挿入されると受容度が低くなった。このように言語類型間だけでなく、言語類型内にも母語の影響が見られ

ることが分かった。ゼロ照応の有無については、本研究で対象とする上級日本語学習者は既に連続した言及時のゼロ照応をある程度習得していることから、母語の影響が見られなかった。ただし、英語母語話者の再導入時のゼロ照応については、母語が影響した可能性が示唆された。

第4節 本研究の成果と教育的示唆

本研究の成果は以下の5点である。

第一に、本研究では、主題卓越言語の特徴のうち、産出されにくいとされてきたヲ格やノ格の主題化といった言語項目に対しても、要因を統制した受容性判断課題を用いることで検討可能とした。それにより、「構文」や「意味的制約」「文頭配置」という習得の難しさの在処を具体的に示した。主題化の指導や学習の際には、上記で挙げた項目は特に母語の言語特徴に配慮しながら行う必要があることを示唆した。

第二に、類型間だけでなく、類型内においても母語が影響することを立証し、類型論的類似性が負の転移を引き起こす事例を示した。

第三に、受容性判断課題と物語発話産出課題という、知識と運用を測る課題を併用し、総合的な考察を行うことで、運用面で見られた「は」や「が」の多用について、知識面から補完的な考察を行うことができた。

第四に、談話における指示対象の言及形式だけでなく、述語の叙述内容について質的に検討することで、先行文脈に既出かどうかという基準のみならず、登場人物の有生性や役割の重要性という指示対象自体の特性、及び、属性や意外性といった述語の叙述内容が、指示対象の選択にかかわることを示した。また、日本語母語話者と学習者の言語使用の背景には、異なる原理が存在する可能性を指摘した。

最後に、先行研究において、高い習熟度の学習者を対象に母語の影響を検証するのは容易ではないとされている (Kellerman 1995, Odlin 1990) が、本研究は類型論的に異なる二言語を母語とする上級レベルの学習者を対象として、類型論的な母語の影響を示すことができた。

第5節 今後の課題

本研究では以下のように、研究対象と研究範囲の拡大を発展課題とする。

- (1) ガ、ヲ、ノ格以外の格の主題化のように、研究対象とする項目を拡大する。
- (2) 第4章で得られた主題化に関わる名詞句の性質や叙述内容について、学習者の知識の有無をはかる実験的検討を実施する。
- (3) 研究の対象範囲を、類型論的特徴が異なる他の言語母語話者に拡大する。それにより、第二言語習得過程を、言語類型論の枠組みによって、どの程度説明し得るかを検討する。
- (4) 習熟度がより低い学習者を対象とした研究、もしくは習得過程の縦断的調査により、主題化に関するどのような知識が習得しやすく、どのような知識が習得しにくいのかをさらに検証する。

参考文献

- Comrie, B. (1981, 1989). *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fuller, J. and Gundel, J. (1987). Topic-prominence in interlanguage. *Language Learning*, 37, 1-18.
- Kellerman, E. (1995). Crosslinguistic influence: Transfer to nowhere? *Annual Review of Applied Linguistics*, 15, 125-150.
- Li, C. and Thompson, S. (1976). Subject and topic: a new typology of language. In C. Li (Ed.). *Subject and topic* (pp. 457-489). New York: Academic Press.
- Nakahama, Y. (2011). *Referent markings in L2 narratives: Effects of task complexity, learners' L1 and proficiency level*. Hituzi Publisher.
- Odlin, T. (1990). Word order transfer, metalinguistic awareness, and constraints on foreign language learning. In B. Van Patten & J. F. Lee (Eds.), *Second language acquisition / foreign language learning* (pp. 95-117). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究』 風間書房
- 三上章 (1970) 『文法小論集』 くろしお出版
- 八木公子 (1999) 「中間言語における主題の普遍的卓越—「は」と「が」の習得研究からの考察—」『第二言語としての日本語の習得研究』 2号, 57-67.